

日露海戦と竹島＝独島の軍事的価値

朴炳渉

(竹島＝独島問題研究ネット 代表)

Naval Battles in the Russo-Japanese War
and Military Value of Dokdo=Takeshima

PARK Byoung-sup

2013年3月

北東アジア文化研究 第36・37合併号
鳥取短期大学北東アジア文化総合研究所

日露海戦と竹島＝独島の軍事的価値

朴炳渉

(竹島＝独島問題研究ネット 代表)

Naval Battles in the Russo-Japanese War
and Military Value of Dokdo=Takeshima

PARK Byoung-sup

キーワード：ウラジオ艦隊（Vladivostok Fleet）

竹島＝独島望楼（watchtower at Dokdo=Takeshima）

リヤンコ島編入（incorporation of the Liancourt rocks）

1はじめに

1904年2月8日、日本海軍が旅順港などを攻撃して日露戦争は始まった。旅順港はロシア太平洋艦隊の母港である。この軍港が日本海軍によって封鎖されたので、その後はバルチック艦隊が極東へ来るまで本格的な日露海戦がなかつたと思われがちであるが、実はその間にも海戦があった。ロシア太平洋艦隊は旅順だけでなくウラジオストックにも支隊があり、戦艦はないものの巡洋艦4隻が配備されていた。このウラジオ艦隊が緒戦において日本海軍の輸送船をしばしば沈めたり、時には東京湾入口にまで出撃して日本に大きな脅威を与えた。本稿ではそうしたウラジオ艦隊の軍事行動や日露海戦の推移、日本海軍の対応策を見るところにする。この対応策の一環として鬱陵島および竹島＝独島の軍事的価値が重視され、両島に望楼が建設された。その一方で竹島＝独島の軍事的価値を重視した外務省政務局長の積極行動が竹島＝独島を日本領へ編入する原動力となった。こうした過程も本稿で見ることにする。なお、本稿で引用した

資料では、カタカナは平仮名に変換した。

2 日露戦争の勃発

日露戦争は、万国公法ですら問題とされる日本の奇襲攻撃で始まった。日本は大国であるロシアを相手に戦うには緒戦でできる限り相手に大きな打撃を与えることが必要不可欠であった。そのために最も有効なのは、宣戦布告する前に相手の軍隊をいきなり攻撃することである。日露開戦時の奇襲攻撃について『明治ニュース事典』はこう解説した。

二月八日、仁川港に日本の輸送船隊（運送船三隻と第四戦隊）が入って、さきに停泊していたロシア軍艦ワリヤークとコレツに出港を促し、同日夜から九日朝にかけて、第四戦隊（瓜生外吉司令官）などがこの二隻を攻撃して沈めてしまった。また東郷平八郎司令長官麾下の連合艦隊主力は、既に六日には佐世保を出港して、八日夜、旅順港外でロシア艦隊に水雷艇の攻撃をおこない、戦艦に損害を与えた。

これは、二月四日の御前会議で開戦を決定して、既定の計画を実行したのである。五日午後には、九州の兵隊を中心に一個旅団の先遣隊が出帆し、仁川に上陸した（仁川の海戦はこの時に起った）。ロシア側にも危機的な情況はわかっていたが、発砲を禁じていたから、日本側の奇襲攻撃として日露戦争は始まったのである。ロシアは九日に、日本に対して宣戦布告をおこない、日本は十日に東洋平和のためにという宣戦の布告を出した。仁川や旅順の海戦は國際法上問題のある行為で、明らかに布告前の奇襲であった。しかし既成事実を作つて、これによって対馬海峡、朝鮮海峡や黃海のほとんど全面にわたる制海権を握り、朝鮮半島や遼東半島への陸軍部隊の上陸を可能にした。

ロシアの海軍にも陸軍にも、日本軍の行動は予想外の展開であった。旅順港外で戦闘が始まった時、旅順の街ではタルク司令官は妻の誕生日の祝宴の最中であったといわれる。この緒戦の出遅れは、暫らく日本軍の行動の自由を許すことになった¹⁾。

ロシアはまさか日本が宣戦布告なしに攻撃してくるとは想ていなかっただけに日本へ対する怒りは相当なもので、日本に対して「外交関係の断絶は、決して敵対行為の開始を以て目すべきものにあらず、かつ日本は二月十一日に至りて、始めて宣戦を公布したるも、八日以来 露国軍艦及び商船に対し、不法極まる攻撃を加え、國際法の原則に背戻せる行為を敢えてしたり²⁾」と非難した。ともかく、日本はこうした宣戦布告前の奇襲攻撃によって黃海などでの制海権を完全に掌握し、戦局を有利に運んだ。後に日本は第2次世界大戦でもハワイ真珠湾などを突然攻撃したが、これは日露戦争の成果をふまえての戦闘行動であった。

3 ウラジオ艦隊の出撃

(1) ウラジオ艦隊の第1次出撃

日本海軍は、日本海=東海側のウラジオ艦隊に対しては何らの対策をとらなかった。そのため、開戦時にウラジオ艦隊の行動は自由であった。2月11日午後10時すぎ、津軽海峡付近に出撃したウラジオ艦隊の巡洋艦ロシヤ、グロモボイ、リューリック、ボガツイリの4隻は、酒田から小樽に向かっていた奈古浦丸（1,084トン）を発見するや、停止させて船員を退避させた後に船を撃沈した。その後、ウラジオ艦隊は同じく酒田から小樽へ向かっていた全勝丸（323トン）を砲撃した。しかし、全勝丸が傾くのを見てウラジオ艦隊は砲撃を止めて回航した（第1次出撃）。全勝丸を撃沈しなかったのは、ウラジオ艦隊の出動を日本人に知らせるために「故意に見逃した³⁾」という。全勝丸は近くの松前へたどり着いて急報を知らせた。その結果、松前の住民はパニックに陥り、「夜の明くるを待たで家財、器具を荷車またはソリに積み込みて……東は山背、泊辺を指して運搬する者引きも切らず、中には各銀行支店が閉鎖して引き上げべしとの噂を信じ、預金を取り付けんと続々各支店に詰め掛けて雜沓を極め、はなはだしきは家屋を見切り売りしたる者さえあるなど、上を下への騒ぎは火事場よりもはなはだし」という混乱ぶりであった（『時事新報』1904.2.17）。間近にせまったくロシアの軍艦に対して住民はさぞかし恐怖のどん底を味わったことであろう。14日には函館や長崎、対馬などの要塞地帯に戒厳令がしかれた。

しかし、こうした事態は開戦前に想定されていた。1903年12月、海軍軍令部長は常備艦隊司令長官 東郷平八郎に私信を送り、ウラジオ艦隊は「高速力をを利用して小樽及び函館近方を脅し 我が艦隊を割かんとするの策を探る」との見通しを伝えていた。これに対して東郷司令長官は、「^{ウラジオストック}浦塩斯徳に在る敵の大巡洋艦か我が北海道を脅す策に対し 我の執るへき策は別に無し 唯成る可く速に横須賀の艦隊を津軽海峡に派遣し置きて該海峡の警備に充て小樽の如きは暫く彼か爲す儘に放棄して可なり⁴⁾」と回答した。北海道は、津軽海峡以外はしばらく放棄し、敵のなすがままにする方針であった。東郷はロシアの旅順艦隊との決戦を重視したのでウラジオ艦隊に対処する余力がなかったのである。しかし、ウラジオ艦隊の脅威が現実になるや、東郷平八郎は、上村彦之丞中将が指揮する装甲巡洋艦5隻などからなる第二艦隊を旅順港封鎖から解いてウラジオ艦隊の対応に振り向けざるを得なかった。3月6日、第二艦隊は報復としてウラジオストックを砲撃した。これは大した損害を与えたものの、ロシアに大きな衝撃を与えた。これを機にウラジオ艦隊は独立作戦部隊ではなくなり、名称に分遣の文字が加わって「太平洋艦隊巡洋分遣枝隊」となり、旅順艦隊の指揮下におかれた。司令官もレイツエンシュタイン大佐からイエッセン少将に交代した。

(2) ウラジオ艦隊の第2、3次出撃

イエッセン少将は就任してわずか1か月で「敢闘精神高揚のため」江原道元山港の日本海軍を攻撃した。これが第3次出撃である。ただし、この出撃を『極秘 明治37、8年海戦史』では第2次出動としているが、これは海軍がウラジオ艦隊の第2次出撃を把握していないかったためである。第2次出撃は2月24日にウラジオストックを出港して江原道元山付近までの海域を探索したが、何事もなく終わった。元山は江華島条約によって早くから日本に開港させられた港であるだけに日本海軍にとって重要な軍港であり、日本軍の物資や兵員補給の重要拠点であった。

ウラジオ艦隊の第3次出撃であるが、4月24日、同艦隊は元山近くで上村第二艦隊の無線を傍受した。しかし、この日は霧が濃く、お互い数マイルまで近

づいても相手に気づくことなくすれ違った。翌25日朝、ウラジオ艦隊の水雷艇2隻が元山港に入り、停泊中の輸送船 五洋丸（601トン）を襲った。水雷艇は五洋丸の乗組員を退避させ、五洋丸を撃沈した。その日の夕刻、元山の北東でウラジオ艦隊は汽船 萩ノ浦丸（219トン）を発見し、船員を収容した後に爆薬を仕掛けた沈めた。夜になってウラジオ艦隊は、悪天候のために船団より分離した輸送船 金州丸（約4,000トン⁵⁾）を発見した。同船には利源で示威をおこなった陸軍第37歩兵連隊をはじめとして298名が乗船していた。また、船内には47mm砲4門を積んでいた⁶⁾。ウラジオ艦隊は、このうち中隊長 椎名大尉など198名を捕虜にしたが、残りの陸軍部隊は降伏を拒否した。そのため、巡洋艦ロシアは金州丸に魚雷を放ち、さらに砲撃を加えて撃沈した。この時の生存者は54名、死者が34名、行方不明が12名であった⁷⁾。この大型輸送船の撃沈は日本海軍にとって衝撃であった。その後、ウラジオ艦隊はウラジオストック砲撃への報復として北海道函館を砲撃する予定であったが、捕虜を収容していたため中止して回航した。その途中で上村艦隊を見つけたが、霧に助けられてうまくやり過ごすことができたという⁸⁾。上村艦隊は金州丸撃沈への報復として4月29日にウラジオストック港に機雷を敷設した。後日、ロシアの水雷艇第707号がこれにふれて沈んだという。

(3) ウラジオ艦隊の第4次出撃

1904年5月15日、中国の旅順では日本の戦艦 初瀬と八島の2隻が機雷にふれて沈没するという重大事件があった。これで日本の戦艦は4隻に減り、戦力が大幅に低下した。ウラジオ艦隊は、日本は戦力低下を補うために上村艦隊が旅順へ応援に行くと予測し、その隙をねらって日本軍の補給路を断つために対馬海峡への出撃を決定した。ところが、上村艦隊は対馬の根拠地に残っていたのである。そうとも知らず、ベゾブラーーゾフ中将指揮下の巡洋艦ロシア、グロモボイ、リューリックの三隻は対馬海峡をめざして6月12日に出港した。第4次出撃であるが、この時にもう1隻の巡洋艦ボガツイリは座礁で破損し、長期間の修理を余儀なくされていたので参加できなかった。

日本海軍の方は、まさか戦力が劣勢なウラジオ艦隊が対馬まで出撃するとは

考えてもいなかったようである。そのため、日本海軍は輸送船にあえて護衛を付けなかった。6月15日午前4時ころ、戦地で特別任務を終えて帰国中の輸送船 和泉丸（3,229トン）は後備輜重兵および船員112名を載せて壱岐附近を航行中であったが、そこをウラジオ艦隊に襲われた。船は撃沈され、生存者はわずか22名であったという⁹⁾。また、そのころ輸送船 常陸丸（6,175トン）は近衛後備連隊の将兵や船員1,238名を載せて関門海峡を通過して玄海灘を航行中であった。常陸丸は和泉丸が砲撃される音を耳にしていたが、誰もが砲撃音を日本軍の演習であると思いこんで意に介さなかった。そのうえ、常陸丸は霧のためにウラジオ艦隊を認識するのが遅れたためにウラジオ艦隊の攻撃を受けて撃沈されてしまった。生存者はわずか147名であった¹⁰⁾。この時、旅順港要塞の攻略に使われる予定であった攻城砲も海底に沈んだ。この影響は大きく、日本軍は旅順で十分な火力の支援を得られず、乃木陸軍大将の第三軍は旅順攻略において無理な強襲によって三回も多大な犠牲を払わねばならなかつたとされる¹¹⁾。

同15日、常陸丸と行動を共にしていた佐渡丸（6,222トン）もウラジオ艦隊の砲撃を日本軍の演習と勘違いして襲われた。ただ、そのころには哨戒艦 対馬がウラジオ艦隊を発見し、急報を受けた上村艦隊が近づきつつあった。そのため、ウラジオ艦隊は佐渡丸に魚雷2発を打ち込んだだけ攻撃を中止して回航した。佐渡丸はかろうじて沈没を免れ、将兵や船員などの生存者は総員1,258名中で993名であった¹²⁾。物的損害は全体の一割程度にとどまったという¹³⁾。他に、羽後丸や芙蓉丸がウラジオ艦隊の追跡を受けたが、被害はなかったという。また、畿内丸も前面にウラジオ艦隊を認めたが、艦隊が常陸丸・佐渡丸を攻撃中に難を逃れたという。また、日ノ丸はウラジオ艦隊を見て退避し、途中で航行中の金沢丸や胆振丸に危険を知らせたという。

ウラジオ艦隊は、上村艦隊の追撃をかわし、翌16日、日本向けの石炭を運んでいた英國のアラントン号（4,253トン）を「戦時禁制品」運搬の口実で拿捕、連行した。さらに、同日午後2時頃 隠岐の沖合にて第九運鉱丸を発見したが砲撃せず、和泉丸の捕虜のうち23名を同船に引渡した¹⁴⁾。その後、艦隊は17日に竹島=独島付近をとおり、18日早朝には津軽海峡に近づいていた。艦隊はそ

こでは軍事行動をとらずに帰港した。

これらウラジオ艦隊の巡洋艦とは別に、海軍中佐ウイノグラットスキー指揮下の水雷艇隊が北海道へ出撃した。16日には安静丸（105トン）及び八幡丸（136トン）の両帆船を撃沈し、17日には幾多の帆船を臨検し、18日には汽船巴港丸（238トン）を臨検したが解放し、19日には帆船博通丸（211トン）を拿捕した¹⁵⁾。この日から霧が深くなつたので水雷艇隊は翌20日夜にウラジオストックへ帰港した。

ウラジオ艦隊は第4次出撃で大きな戦果を上げ、しかも上村艦隊に発見されてもほとんど交戦することなく帰還できた。この戦果は旅順のロシア兵を奮い立たせた反面、日本では上村艦隊に非難が殺到した。ある衆議院議員が「〔海軍は〕濃霧のためと言い訳しているが、濃霧を逆さにした無能ではないか」と発言して海軍への憤激に油を注いだ。「濃霧」を逆さにして「無能」と皮肉られた話が第二艦隊将兵に伝わるや、彼らは霧の中で捕まらないウラジオ艦隊を求めて追跡しながら泣いたという¹⁶⁾。きびしい世論の非難を浴びた海軍は、伊集院海軍軍令部次長が上村長官へ「海軍軍事に関する能力を有せざる者は 或は遭難者の関係より 或は誤解より之を非難し新聞雑誌等に評論することなしとせず 此等に対しては当方に於て夫々手段を講じ事の真相を知了せしむべきを以て毫も此等のこととに顧慮せず益々奮て当初の目的を達し 良果を収むることを期せられん¹⁷⁾」と慰めの電報を送ったくらいである。

当時はレーダーどころか、航空機すらなかったので、敵艦の発見は双眼鏡に頼るしかなかった。上村艦隊は15日から必死になってウラジオ艦隊を探したが、雨や霧のために何度も見失ってしまった。上村艦隊は「十七日、敵艦隊はなお本邦沿岸に在るものごときを以て、これを邀撃せんがため、巡洋艦隊を以って搜索列を張り南下せり。この日、天候至って平穏にして視界広く、心ひそかに搜索の好望なるを期せしも、ついに敵艦隊に会せず。同日午後、対州の北端を距る北東約百海里の地点に来たり¹⁸⁾」とされた。しかし、ウラジオ艦隊は前述のように17日には竹島=独島附近にいた¹⁹⁾。これは同島でアシカ猟をおこなっていた漁夫らが確認したのであるが、絶海の孤島にいた漁夫らにはその情報を海軍へ届ける方法はもちろんなかった。こうした貴重な情報は生かされず、

上村艦隊はまったく無駄な探索を懸命におこなったのである。このようにまったくの徒労を避けるためにも竹島=独島のような絶海の孤島に望楼を設けることは軍略上いかに重要であるかがわかる。

(4) ウラジオ艦隊の第5次出撃

1904年6月下旬、ウラジオ艦隊に第5次出撃命令が出された。その任務は、「先ず元山を襲撃してそこで日本軍と交戦し、その後 敵に最大限の損害を与えて黄海に向かうというものであり、敵の海上輸送を破壊し、そして兵力に大差がなければ敵艦艇との交戦を回避してはならないというものであった²⁰⁾」という。

6月31日朝、ウラジオ艦隊は八隻の水雷艇が元山港内に出撃したところ、港はほとんど空であった。わずかに帆船 清渉丸（122トン）と汽船 幸運丸（36トン）が泊まっていたので両船を焼き、元山市街に四七ミリ砲で砲撃を加えた。その時、ウラジオ艦隊の水雷艇第204号は座礁のため故障して航行不能になつたので、やむなく自爆した。残りの水雷艇は仮装巡洋艦レナと共にウラジオストックに帰投した。一方、ペゾブランゾフ中将が率いる巡洋艦3隻は南下し、鬱陵島から発見されるのを避けるため、夜になって同島近辺を通過して対馬海峡に向った。7月1日午後4時ころ対馬海峡に近づいた時に上村艦隊第2戦隊の艦船を多数発見した。明らかにウラジオ艦隊は不利なので退却を始めた。しかし、旧式巡洋艦リューリックの速度が遅いため、上村艦隊に追いつかれ、両国の艦船は交戦状態になった。しかし、日没のため交戦はやみ、ウラジオ艦隊は日本軍から逃れた。その途中、日本の京釜鉄道会社が雇った英國汽船チエルテンハム号（3,741トン）を拿捕しウラジオストックへ連行した²¹⁾。

(5) ウラジオ艦隊の第6次出撃

ウラジオ艦隊は驚くべき第6次出撃を敢行した。巡洋艦3隻が大胆にも津軽海峡を通って太平洋に出て東京湾沖合にまで出撃したのである。この出撃目的について『報知新聞』（1904.7.31）は、「同艦の東京湾付近に来たりしは、米国より来たれるコレア号を待ち受けたるもののごとし」と簡単に報じた。ロシ

アがねらったのは「200万ポンドの金」を積んだ船であるとされている²²⁾。日本はアメリカから巨額の戦費を調達していたが、この大金が日本へ持ちこまれると戦況に大きな影響を与えるので、それを阻止しようとして東京湾沖合まで出撃したようである。ウラジオ艦隊は7月17日にウラジオストックを出港し、20日夜明け前の午前3時半に津軽海峡に入った。海峡の北側には戒厳令がしかれている重要要塞の函館港があるが、要塞は何らの軍事行動も取らなかったようである。ゆうゆうと津軽海峡を渡ったウラジオ艦隊は手当たり次第に船舶を臨検し、必要に応じて輸送船などを撃沈した。その概要は表1のとおり、7隻を撃沈、2隻を拿捕した。

ウラジオ艦隊が7月25日に行動した千葉県野島崎沖はまさに東京湾の出入口であるが、そこをウラジオ艦隊が一時的に制圧して自由に軍事活動をおこなつたのである。日本は首都を守るために近くの横須賀に海軍があるが、軍艦は函館へ行って基地が空だったのか、そこからの出撃はなく、首都海域は無防備状態であった。

しかし、ウラジオ艦隊の出撃は永く続かなかった。7月23日にはグロモボイ

表1 ウラジオ艦隊、第6次出撃時の臨検²³⁾

月 日	船 舶 名	国 籍	排 水 量	処 置	場 所
7/20	高島丸	日	318 ton	撃沈	北海道 恵山沖
	サマラ号	英	2,831	解放	
	共同運輸丸	日	147	解放	
	喜宝丸		140	撃沈	
	第二北生丸		91	撃沈	
7/22	アラビア号	独	2,863	拿捕	茨城県沖
7/24	ナイトコマンダー号	英	4,306	撃沈	静岡伊豆沖
	自在丸	日	199	撃沈	静岡県 御前崎沖
	福就丸		130	撃沈	
	団南號	英	2,269	解放	
7/25	テア号	独	1,613	撃沈	千葉県 野島崎沖
	カルカス号	英	6,748	拿捕	

号が石炭不足を訴えていたので、燃料切れになる前に帰港せざるを得なかった。そうとは知らない日本海軍は、ウラジオ艦隊が静岡県御前崎に現れるとの知らせを受けるや、上村長官は敵が今回も黄海へ行くだろうと予想して「全艦隊を挙げて出動南下し、南海方面の海面に向ふ……同（27日）午後4時 紀州潮岬の灯台沖を通過」した。上村艦隊は九州の南を廻って静岡県の方へ東進したのであった。

そのころ、ウラジオ艦隊はすでに千島列島近くにいたので、上村艦隊はまったくの誤算であった。誤算はウラジオ艦隊の方にもあった。ロシア側は上村艦隊がてっきり津軽海峡に向かっていると思いこみ、帰路として遠回りの宗谷岬を通るルートを選択した。ところが、クナシリ水道に近づいた所で霧が出始めた。翌28日には霧はますます深くなり、先に進めなかつた。石炭不足が心配なウラジオ艦隊はやむなく、危険な津軽海峡を通ることにした。霧は30日早朝になってやっと晴れたので、ウラジオ艦隊は逆潮の中を午前11時ころ津軽海峡へ突入した。当然、函館要塞からは丸見えである。日本海軍は軍艦高雄、武藏、水雷艇が追ったが、ウラジオ艦隊はあえて交戦しなかつた。というのも海峡を出れば上村艦隊との交戦が必至であると考えて弾丸を節約したのである。しかし、上村艦隊は方向違いの場所にいたので、ウラジオ艦隊は交戦することなく母港へ戻つた²⁴⁾。

(6) ウラジオ艦隊の第7次出撃

ウラジオ艦隊は全般的に幸運続きであったが、幸運はいつまでも続くものではない。ついに上村艦隊と本格的に交戦する時がやってきた。8月12日、ウラジオ艦隊の巡洋艦3隻は第7次出撃をおこなつた。この目的は、旅順港から脱出するはずのロシア旅順艦隊と対馬海峡で合流するためであった。しかし、旅順艦隊は旅順港を出るや黄海で日本海軍に敗北し、大部分が旅順港に戻つたため、合流は不可能であった。旅順艦隊の代わりにウラジオ艦隊の前に現れたのは巡洋艦4隻をはじめとする上村艦隊であった。8月14日、両艦隊は韓国東岸の蔚山沖で出会うや、すぐに砲撃戦を開始した。日本軍は装備に優れる上に巡洋艦が1隻多いので圧倒的に有利であった。やがて、旧式で速度が遅く、防備

の弱い巡洋艦リューリックは砲撃を受けて航行不能になり、自沈した。残りのロシアとグロモボイは激闘5時間の末に逃げ延びたが、修理に1か月を要するほどの損害を受けた。戦死者はロシア側が343名に対して日本側は42名であった。ここに上村艦隊はやっと一矢を報いることができたのである。

その後、修理の終わったウラジオ艦隊の巡洋艦2隻は対馬沖海戦直前にも出撃し、八重丸、占領丸、弘陽丸、北征丸を沈めたようであるが、日本側に記録がなく詳細は不明である²⁵⁾。

(7) 対馬沖（日本海）海戦

旅順艦隊が黄海海戦にて日本の連合艦隊に敗北するや、ロシアはヨーロッパのバルチック艦隊を第2太平洋艦隊と名づけて旅順へ派遣することにした。連合艦隊がこれを迎え撃つには11月までに旅順港を離れ、日本へもどつて艦艇の修理や海戦の準備を始めなければならなかつた。さもなければ、連合艦隊はバルチック艦隊と旅順艦隊との挟み撃ちになつて全滅しかねない。そのタイムリミットに追われたのは皮肉にも日本陸軍であった。海軍が撤退する前にいかなる犠牲を払おうとも旅順艦隊を山側から攻撃して港から追い出し、海軍と共同で敵を撃滅する必要があつた。そうしないと満州地方での戦闘継続に欠かせない海上補給に支障が出る。陸軍でその任務をになつたのが大将 乃木希典であった。彼はそれこそ数万人の犠牲者を出してやつと203高地を12月5日に制圧し、そこから港内に閉じこめられていた旅順艦隊を攻撃し、海軍と共同で撃滅した。タイムリミットギリギリであった。

こうして旅順が陥落したため、バルチック艦隊は行き先を旅順からウラジオストックへ変更した。その航路として、日本を迂回して太平洋から北海道宗谷海峡の北を通る選択肢もあったが、世界最強ともいわれるバルチック艦隊はあえて対馬海峡を通過した。そこで待ちかまえていたのが、東郷平八郎の率いる連合艦隊である。1905年5月27日、両艦隊は一大決戦「対馬沖海戦」をくりひろげた。この海戦は日本では日本海海戦と呼ばれるが、国際的には対馬沖海戦と呼ばれる。同日の海戦（第1～3合戦）結果は、長旅で疲弊して戦意のなえたバルチック艦隊の大敗北であった。激戦の末、旗艦スワロフは破損し、提督

ロジェストウェンスキー中将は負傷した。そのため、指揮はネボガドフ少将がとることになった。翌日、日本の連合艦隊は決戦場を鬱陵島南方と見て集結したところ、予想どおりロシアの主力艦隊がやって來た。ロシアがここを退却路に選んだのは、竹島=独島海域だけが監視の空白区域にあたるためであろう。そのロシア側の意図は日本海軍に見抜かれたようである。この日、竹島=独島の南方で重大な「第4合戦」がおこなわれた。ロシアは4隻が降伏し、指揮官ネボガドフ少将は捕虜になった。そのため、竹島=独島海域はバルチック艦隊終焉の地になった。また、日本軍はこの日の残りの「第5~10合戦」でも圧倒的な勝利をおさめた。負傷中のロジェストウェンスキー提督は鬱陵島南西40カイリの地点で降伏した。また、破損したロシアのドミトリードンスコイは翌29日に鬱陵島東岸で自沈し、乗組員は鬱陵島へ上陸した。これらの勝利は官報や各新聞において「リヤンコールド岩附近²⁶⁾」、「リヤンコイルド岩附近²⁷⁾」における戦闘として大々的に紹介された。こうして鬱陵島・竹島=独島海域の軍事的な価値が広く一般にまで認識されたのである。

4 郁陵島、竹島=独島の望楼と海底電線

(1) 望楼と通信の重要性

日露戦争の初期、日本海軍は想定内とはいえウラジオ艦隊による被害が続出したので、ウラジオ艦隊対策が急務になった。そのために日本海軍は日本海=東海の敵艦監視体制を強化することにした。具体的には、(1)松島（鬱陵島）に無線電信所を設ける、(2)慶尚北道迎日湾口の冬外串角に仮設望楼を設ける、(3)リヤンコールド（竹島=独島）に望楼を設ける、(4)松島とリヤンコールド間に海底電線（第1次）、リヤンコールドと隱岐の高崎山に海底電線（第2次）を設けることを1904年5月30日に決定した²⁸⁾。

松島（鬱陵島）の無線電信所は望楼を兼ねるのであろうが、海軍は松島では簡易な無線電信所で済ませても、リヤンコールド（竹島=独島）には当初から望楼を立てて海底電線を引くことを計画していた。それだけ竹島=独島の軍事的価値を重視したといえよう。ウラジオ艦隊が竹島=独島付近を通って出撃したら、それを日本軍が知るすべは哨戒艇によるパトロールしかなければ竹島

=独島望楼は重要なのである。実際、ウラジオ艦隊は第4次出撃時にこのルートを利用して対馬付近で多くの輸送船など沈め、帰りもこのルートを利用した。その際に上村第二艦隊は探索に辛酸をなめたのは前述のとおりである。この苦い経験から日本海軍は日本海=東海での敵艦監視体制の充実をはかり、5月30日に決定した先の監視体制を7月5日に変更した。具体的には、(1)仮設望楼を朝鮮海峡の鴻島や絶影島、山口県の見島に各1か所、鬱陵島に2か所設置する、(2)海底電線を対馬竹敷一鴻島松真間、竹敷一沖ノ島・角島・見島間、慶尚北道竹辺一鬱陵島間に設置、(3)沖ノ島望楼にて電信事務を開始、(4)北海道の主要灯台所在地に海軍監視兵を配置することなどであった²⁹⁾。鬱陵島に2か所も望楼を設置して海底電線を敷設する計画を立てたのは鬱陵島の戦略的価値を重視した結果である。しかし、重要な竹島=独島望楼の設置は見送られた。それだけ竹島=独島望楼の設置や運用は難点が多かったのであろう。

(2) 郁陵島の望楼

1904年7月8日、山本海軍大臣は日本海=東海における敵艦の監視体制計画を実行するため、大浦通信大臣に海底電線の敷設を照会した。これを受け大浦大臣は11日に敷設を命令して鬱陵島では仮設望楼候補地の選定と着工が同日におこなわれた。いかに鬱陵島の望楼建設が火急だったかが推しがられる。建設資材を運ぶ佐渡国丸を海軍第19艇隊が護衛して8月8日に鬱陵島へ到着した。第19艇隊は島を一周して望楼の場所を調査し、西望楼は玄圃、東望楼は道洞南部に決めた³⁰⁾。この時、日本は2月に韓国へ強要した日韓議定書によって「軍略上必要の地点を臨機収用することを得る事」とされたので、望楼の場所を決めたら有無を言わせず、一方的に着工できた。ただし、事後でも収用の通告は必要である。

一方、海底電線は韓国東海岸の竹辺から鬱陵島の東望楼へ敷設されることになった。敷設船 沖縄丸は軍艦 新高の掩護を受け、まず慶尚北道竹辺付近で長崎一ウラジオストック間の海底電線を苦労の末に探しだし、これを切断して陸揚げした。そこから海底電線を鬱陵島へ向かって沖縄丸が敷設し、9月24日に東望楼への接続を終ろうとしていた。その時、ウラジオ艦隊が3日前に出港し

表2 麟陵島・竹島=独島の望楼

望楼名	位 置	調査日・軍艦	運 用	海底電線接続
松島東	道洞南	1904.8.8、第19艦隊	1904.9.2開始	1904.9.30完了
松島西	玄圃		1905.9.22廃止	
松島北	亭石浦	1905.7.14 野崎直吉中尉調査	1905.8.16開始	1905.8.16完了
竹島	東島	1904.11.20、対馬 1905.6.13、橋立	1905.8.19開始 1906.7払下げ	望楼を素通り (1905.11.9)

たとの情報が入ったため、沖縄丸は応急接続を済ませて対馬へ帰港した。しかし、ウラジオ艦隊出動の情報は誤報だと判明したので、29日に本接続がおこなわれ、30日にすべての工事が完了した。

翌年の対馬沖海戦後、日本海軍は麟陵島東北部に本格的な望楼を立てることにした。そのための調査が海軍中尉 野崎直吉によって7月14日になされた。野崎は、展望視野が230度以上あり、電気的な接地が容易な観音島近くの亭石浦を候補地として報告した³¹⁾。これが北望楼であり、東望楼への海底電線が延長されて接続され、8月16日に運用を始めた。この完成にともなって翌月22日、仮設の東望楼と西望楼は廃止が決定した³²⁾。

(3) 竹島=独島の望楼

竹島=独島の望楼は、前述のように1904年5月にはすでに必要性が認識されていた。しかし、設置や運用には困難が伴うので計画はなかなか実行されなかつた。その一方でウラジオ艦隊による輸送船攻撃が続くや、竹島=独島望楼の必要性はますます高まった。これはウラジオ艦隊が大敗した8月以降も基本的に変化がなかったようである。バルチック艦隊との海戦が予想されたためであろう。同年11月13日、海軍軍令部は軍艦対馬の仙頭武央艦長に対して「『リヤンコルド』島ハ電信所（無線電信所に非ず）設置に適するや否やを視察すること³³⁾」を命じた。やはり、リヤンコルド（竹島=独島）に望楼を設置し、無線電信所ではなく、海底電線を敷設するのが望ましいと考えていた。11月20日、軍艦対馬は竹島=独島を調査し³⁴⁾、東島と西島に各1箇所ずつ候補地があるこ

とを報告した。同時に同島の厳しい自然条件に関して「要するに本島は瘦たる禿岩にして海洋の蛮風に露出し其の猛威を避くるに足るの面積を有せず 炊くに燃料なく 飲むに水なく 食うに糧なし³⁵⁾」と説明した。そのうえで、このきびしさ故に漁民らのアシカ獵が6,7月しかおこなわれないと付け加えた。こうした困難のためか、海軍はバルチック艦隊との決戦を控えているにもかかわらず、工事が可能な春になっても竹島=独島に望楼を建設しなかった。竹島=独島望楼の運用の困難さを考慮して見送ったのであろう。

しかし、翌年5月の対馬沖海戦において前述のように二番目に大きな海戦が竹島=独島付近でおこなわれたのである。この海戦によって竹島=独島の軍事的価値が再認識されたのか、海軍は日露海戦の可能性がほんくなつたにもかかわらず、竹島=独島望楼を設置する方向に動きだした。海軍の建築科技手水口吉五郎らは6月13日に軍艦橋立て竹島=独島へ行き、望楼建設の調査をおこなった。水口は、東島で現在ヘリポートのある高所が望楼を設置するのにふさわしいと判断し、詳細な見取り図などを書いて報告した。その報告や、橋立艦長 福井正義の報告を総合して第3艦隊司令官 武富邦鼎少将は、西島は高くて視野が広いが雲や霧がかかりやすく適当でないこと、技手が想定した東島がふさわしいこと、アシカ獵をおこなっている漁夫の例からすると月に1,2回の糧食補給をすれば生活が可能なこと、ただし冬季の交通対策が必要なことなどを記した報告書を提出した³⁶⁾。これにもとづいて7月22日、海軍人夫38名が上陸して望楼を建設した³⁷⁾。望楼は「コンクリート並びに煉瓦の基礎で、木造であり、無電台が付属していた³⁸⁾」という。この望楼は8月19日から活動を開始した³⁹⁾。一方、海底電線は竹島=独島の直近を通って敷設されたが、望楼には接続されなかつた。その理由は、海底線の陸揚げは東島の西岸が最適であるが、そこで大石が累々としていて激烈な風波から電線を保護するには維持管理が大変なためとされた⁴⁰⁾。そのため、海軍は必要に応じて海底電線を望楼に連結できるようにして竹島=独島望楼にはあえて接続しなかつた。結局、海底電線は新設の松島北望楼から竹島=独島の近くを経て、当初計画した隠岐ではなく松江に接続され、11月9日に最終試験に合格した⁴¹⁾。こうして海底電線は、韓国における日本海軍の碇泊地である竹辺から麟陵島北望楼、竹島=独島

望楼の近くをとおって松江へ接続され、敷設が完成したのである。

日露戦争が終わるや竹島＝独島の望楼は不要になったのか、1906年7月、海軍の舞鶴鎮守府は中井養三郎が提出した「竹島仮説望楼建造物払下願」に応じて払い下げた⁴²⁾。その後、望楼は1933年にアシカ漁業者の浜田正太郎により破壊され、木材等が小屋掛けに利用されたという⁴³⁾。結局、竹島＝独島望楼は建設時期が遅かったため、ほとんど役に立たずに破壊された。

5 竹島＝独島の領土編入

緒戦にてウラジオ艦隊が猛威をふるう中、竹島＝独島望楼の必要性を痛感していたのは海軍ばかりではなかった。外務省でも政務局長 山座円次郎が望楼の重要性を早くから痛感していたようである。それが中井養三郎との面談において明らかになっているので、その過程を見ることにする。

1904年、中井養三郎はリヤンコ島（竹島＝独島）でのアシカ乱獲競争を制するため、同島におけるアシカ猟の独占をもくろんで政府へ働きかけをおこなった。中井はリヤンコ島を韓国領と信じて韓国にある日本の出先機関へ申請しようとしたが、農商務省水産局長の牧朴眞や海軍水路部長の肝付兼行らと接触するうち、リヤンコ島は無主地であるとのアドバイスを受け、「リヤンコ島領土編入並に貸下願」を内務・外務・農商務省宛にして願書を内務省へ9月29日に提出した。これに対して内務省は強硬に反対した。かつて同省は竹島＝独島を日本の版図外と判断したうえで慎重にそれを確認する太政官指令を受けていただけに、「此時局に際し 韓国領地の疑ある莫荒たる一箇不毛の岩礁を収めて、環視の諸外国に我が韓国併呑の野心あることの疑を大ならしむ⁴⁴⁾」として却下しようとした。しかし、外務省の考えは違っていた。政務局長の山座円次郎は中井養三郎に「時局なればこそ其（リヤンコ島、筆者注）領土編入を急要とするなり 望楼を建築し無線もしくは海底電信を設置せば敵艦監視上極めて屈竟ならずや 特に外交上内務の如き顧慮を要することなし 須らく速かに願書を本省に回付せしむべし⁴⁵⁾」と語り、中井を積極的に支援した。韓国を熟知する山座は日露戦争の遂行上において竹島＝独島における望楼の設置が軍事上きわめて重要であると判断し、領土編入を急要と考えたのである。ただ、当時の日本は

韓国において「軍略上必要な地点を臨機収用」できたので、単に望楼を設置するだけなら領土編入の必要はなかった。しかし、軍略上の収用は韓国政府へ通告する必要があり、結果的に軍事的な秘密が保てないので竹島＝独島望楼を秘密にしておきたい日本としては収用という形式は避けたかったことであろう。また、当時の日本は領土や勢力圏の拡張に邁進していたので、中井のリヤンコ島編入願いはまたとない領土拡張の好機であった。しかも列強との関係でいえば、イギリスとは山座が関係した第二次日英同盟によって日本が韓国を勢力圏におくことが了承されていたし、アメリカとは同国から戦費を調達したり、桂ータフト密約を結ぶような友好関係にあった。こうしたパワーバランスを熟知した山座の立場からすれば、韓国問題に関するかぎり外交上の配慮は不要であると判断したのも自然の成り行きであった。結局、日本政府内で山座円次郎の論理がとおり、かつて日本の版図外とされたリヤンコ島は無主地先占を口実に日本領への編入が1905年1月に閣議決定され、竹島と命名された。これを受けて島根県は2月に告示40号で同島を隱岐島司の管轄下とした。こうした経過を見れば、日露戦争という時局が朝鮮領と認識していたリヤンコ島の領土編入に決定的な作用をおよぼしたことがわかる。なお、リヤンコ島は行政的に1900年大韓帝国勅令41号にて規定された鬱陵島郡の石島であろうことはすでに本誌32号に記したとおりである⁴⁶⁾。また、最近の研究で竹島＝独島では1895年ころから鬱陵島を基地にした韓国民のアシカ猟がおこなわれるなど⁴⁷⁾、経済的にも鬱陵島と密接な関係があり、決して無主地ではなかつたことが明らかになっている。

一方、内務省は「版図の取捨は国家の重大事」と認識していたものの、竹島＝独島の編入を官報に公表しなかった。そのため、主要新聞もリヤンコ島の編入を報道しなかったので⁴⁸⁾、「竹島」の名はほとんど一般に浸透しなかった。それどころか、対馬沖海戦を報じる『官報』（1905.5.29）ですら「竹島」の名を使用せずに「リヤンコールド岩」の名称を用いた。この名称は1週間後にやっと「竹島」に訂正されたが、その後も外務省『通商彙纂』50号や、それを転載した『官報』⁴⁹⁾は同島を「ランコ島」の名で記事を掲載したりした。その記事はランコ島を鬱陵島付属の島であるかのように見たのである。『官報』はいうまでもなく日本政府の公式見解を表明する刊行物であるが、このような『官報』

の認識は、竹島＝独島を無主地として領土編入した措置が適切でなかったことを示すものといえよう⁵⁰⁾。

注

- 1) 『明治ニュース事典』第7巻、毎日コミュニケーションズ、1986、p. 27。
- 2) 東京朝日新聞、1904.3.3。
- 3) 海軍軍令部編『極秘 明治三十七八年海戦史』第1部10巻、p.80。
- 4) 同上書、第1部2巻、p. 15。
- 5) 前掲『明治ニュース事典』第7巻、p. 451。
- 6) 海軍軍令部編、前掲書、第1部10巻、p. 119。
- 7) 海軍軍令部編、前掲書、第1部、卷10.11付表及付図第6号 金州丸乗員調査票。
- 8) アガーポフ「露日戦争におけるウラジオ巡洋艦戦隊の作戦」、『日露戦争(二)』軍事史学会、2005、pp. 101-103。
- 9) 海軍軍令部編、前掲書、第1部卷10、11付表10、11号。
- 10) 同上。
- 11) アガーポフ、前掲書、2005、p. 105。
- 12) 海軍軍令部編、前掲書、第1部卷10、11付表10、11号。
- 13) 海軍勳功表彰会『日露海戦記』1906、p. 214。
- 14) 海軍軍令部編、前掲書、第1部10巻、p. 167。
- 15) 海軍軍令部編、前掲書、第1部10巻、p. 167-168。
- 16) ウォーナー・ウォーナー『日露戦争全史』時事通信社、1978、p. 324。
- 17) 海軍軍令部編、前掲書、第1部10巻、p. 155。
- 18) 『時事新報』、1904.6.25。
- 19) 『軍艦新高行動日誌』9月25日条に「露国軍艦3隻同島（竹島＝独島、筆者注）付近に現はれ一時漂泊し後北西に進航せるを実見せりと云ふ」との記事がある。
- 20) アガーポフ、前掲書、2005、p. 106。
- 21) 海軍軍令部編、前掲書、第1部10巻、p. 195。
- 22) ウォーナー、前掲書、p. 323。
- 23) 海軍軍令部編、前掲書、第1部11巻、pp. 47-48を元に作成。
- 24) 海軍軍令部編、前掲書、第1部11巻、pp. 48-49。
- 25) 堤明夫「アガーポフ論文への補論」、『日露戦争(二)』軍事史学会、2005、p. 122。
- 26) 『官報』号外、1905.5.29、30。

- 27) 『東京朝日新聞』、1905.5.30。
- 28) 海軍軍令部編、前掲書、第4部4巻、p. 20。
- 29) 海軍軍令部編、前掲書、第4部4巻、p. 10-11。
- 30) 海軍軍令部編、前掲書、第4部4巻備考文書、p. 339。なお、同書第4章の表「明治三十七八年戦役中望楼一覧表」では起工年月日が8月3日になっていて備考文書53号の8月8日調査とくい違うが、詳細な備考文書の記述が正しいと思われる。
- 31) 海軍軍令部編、前掲書、第4部4巻備考文書、p. 350。
- 32) 海軍軍令部編、前掲書、第4部4巻、p. 243。
- 33) 「軍艦対馬戦時日誌」1904年11月13日。
- 34) 「軍艦対馬戦時日誌」1904年11月20日。
- 35) 海軍軍令部編、前掲書、4部4巻備考文書、p. 366-7。
- 36) 海軍軍令部編、前掲書、4部4巻備考文書、pp. 368-9。
- 37) 「竹島海驥漁獵成績表明治三十八年」、『竹島貸下 海驥漁業書類』051-03（島根県総務課所蔵）の7月22日欄に「海軍人夫38名上陸」との記載がある。
- 38) 外務省アジア局『竹島漁業の変遷』、1953、p. 33、島根県立図書館所蔵。
- 39) 海軍軍令部編、前掲書、第4部4巻、p. 233。
- 40) 海軍軍令部編、前掲書、第4部4巻、p. 94;『明治三十七八年電線関係』、pp. 1058-1083。
- 41) 海軍軍令部編、前掲書、第4部4巻、pp. 93-5。
- 42) 明治39年7月16日付島根県文書「庶第529号」、『竹島貸下・海驥漁業書類』綴。
- 43) 外務省アジア局、前掲書、1953、p. 34。
- 44) 堀和生「1905年 日本の竹島領土編入」、『朝鮮史研究会論文集』第24号、1987、p. 117。
- 45) 同上。
- 46) 朴炳渉「明治時代の鬱陵島漁業と竹島＝独島問題(2)」、『北東アジア文化研究』32号、2010、pp. 42-51。
- 47) 『民國日報』1962年3月19日、「独島は昔から我々の土地」。記事の和訳は池内敏『竹島問題とは何か』名古屋大学出版会、2012、p. 251；金秀姫「竹島の日」制定以後の日本の獨島研究動向（韓国語）『獨島研究』10号、2011、p. 190。
- 48) わずかに地方紙の『山陰新聞』(1905.2.24)が「隱岐の新島」と題する6行ほどのベタ記事で新島が竹島と命名されて隱岐島司の所管になったことを報じた。ただし、記事に旧名の松島やリヤンコールドの名はない。
- 49) 『官報』、1905.9.18、「韓国鬱陵島現況」。
- 50) 朴炳渉、前掲「明治時代の鬱陵島漁業と竹島＝独島問題(2)」、p. 60。